

新婚時代の思い出

西区・甲北支部 林 敏雄

人生で就職と並んで結婚は大きなイベントの一つである。民放テレビに落語家 桂 文枝司会の「新婚さんいらっしゃい」という人気長寿番組があり、馴れ初めを根ほり葉ほり追及して面白い。私は広島的女性と結婚したので、どうしてそうなったのか聞かれることがある。話せば長くなるので、多分“赤い糸で結ばれていたのでしょう”，とって誤魔化している。

伴侶探しに昔は見合いが多く、女は25歳、男は30歳までに結婚するのが普通とされていた。

昭和4年東京生まれの私は戦後旧制七高の学生時代、卒業数カ月前に結核で倒れ、ストマイなどまだ有効な治療法が無く、健康回復に長年月を要した。心機一転鹿児島大学医学部を受け直し合格出来て良かった。

当時、国分市（旧）の郊外に住んでいたの、鹿児島市内に間借りして通学し、土日はバスで国分に帰っていた。或る日、加治木町のバス停で、東京のファッションショーから抜け出てきたような妙齢の女性が降りていたので、“掃き溜めに鶴”を見た気がして驚いた。当時、町周辺は畠ばかりでミスマッチな光景だった。

卒業が1年後に迫った頃、クラス会で自分達の手で卒業アルバムを作ることになり、まだ白黒写真時代で、私が委員長となって委員会を立ち上げた。

9月の残暑厳しい或る日曜日、国分の自宅暗室で写真を現像・引き伸ばししていたら、小学1年の姪がお客さんだよと呼びにきた。



客は女性3人で、ひとり母の友人の若い男女を結びつけるキュービット役が得意の〇さんと、私とも面識があった。あと二人はAさん姉妹で、3人で国分の町に遊びに行ったついでに寄ってみたという。

茶飲み話が進む内、お姉さんのご主人は私の母の従弟で、加治木町で大きな婦人服店を経営されているらしい。昭和30年代はまだブレタポルテ（既製服）の時代でなく、個人注文が普通で、デザインなどを決めるのが妹さんの役割で、15人程いる縫い子さんが仕上げで渡しているという。妹さんは広島の県立高校を卒業後、東京のB服飾専門の学校で、デザインや縫製技術を学んだ。この学校は教養の面でも熱心で、一流音楽家の演奏を聴いたり、ホテルでテーブルマナーを学んだり、秩

父の長瀬溪谷に遠足に行ったりしたという。渋谷に近い駒場の兄の家から通学したらしいが、私は青山にいて渋谷には歩いて頻りに遊びにいていたので、話に花が咲いてしまった。

昭和35年、岸 信介総理の時代、60年安保改定闘争で、左翼全学連学生がゲバ棒をもって国会議事堂内に雪崩れ込み、警官隊との激しい揉み合いで、東大学生の樺 美智子^{かんぼ}が転倒して圧死した。その頃出だしが“アカシアの雨に打たれて死んでしまいたい”という歌が、安保闘争とは関係ないのだが盛んに唄われた。そして妹さんが歌手の西田佐知子に似ているという。加治木の店は鹿児島市にも支店を出しており、妹さんは両店を往復していたので、私が見たバス停で降りた女性と同じだと確信した。

妹さんが25歳になったので結婚相手を見つけて欲しい、と広島の母親からしきりに言ってくるので、色々話はあるがまだまとまっていならしい。

3人と別れて暫くして、私と正式に見合いをして欲しいと連絡があった。私は既に30歳を超えていたが、まだ無収入の学生で結婚のことは考えていなかった。しかし妹さんは私が厭だという気が起こらなかつたらしく、天文館で会うことになった。ところが話が予想外に進んでしまい、当分経済的には父が二人の面倒をみることで、昭和38年4月10日に式を挙げることまで決ってしまった。絆という字は系偏に半分と書くが、二人が結ばれて1本になることになった。日取りは丁度4年前の同じ日に、上皇様が皇太子時代、美智子さまと結婚され、オープンカーでパレードされた光景が忘れられず、私達から希望した。

結婚式には担任の佐藤八郎教授（第二内科）が主賓として出席して下さり、九州一周の新婚旅行もさせて貰ったし、天文館でクラス歓

迎会も開いていただいて幸せだった。

卒業アルバムは布張り表紙・厚さ7cmで立派なのが完成し、個人紹介の写真は私だけ夫婦二人で、紹介コメントは「勇者にあらざれば佳人を得ず」とあった。

医学部近くに一軒家を借り、専業主婦となった家内と新婚生活が始まり、掃除洗濯や食事からも解放され、急に楽になった。やがて料理は上手でテレビの料理番組は欠かさず見ているようだし、生活上の知恵も豊富なことが分かったが、自らも雑学博士を名乗っていた。

当時、橋 幸夫・吉永小百合の「いつでも夢を」という歌が流行っており、二人でダンスを楽しんだ。西田佐知子は哀愁を帯びやや鼻にかかった声が魅力的で、“アカシア・・・”以外のブルース曲なども沢山唄うので好きだった。テレビで歌うと小1の姪が勘違いして、オバちゃんが出ているといていたのを思い出す。しかしタレントの関口 宏と結婚してから歌謡界から消えたのは残念だった。

卒業後は鹿大第二内科、鹿児島医療センター、阿久根、指宿など国立病院に勤め、定年後は級友の大勝洋祐先生の病院や老健施設で仕事した。

今年6月に満90歳の卒寿を迎えた。山あり谷ありの波乱万丈だったが、子供2人、孫5人に恵まれ、幸せな人生であった。「世界遺産めぐり」と称して夫婦で40数カ国訪問出来たし、今も夫婦の話題に事欠くことがない。私は現在病気療養中の身で、家内の老老介護は大変のようだが、献身的努力にはひたすら感謝するしかほかはない。